花と匂い

伊藤整

新潮社版

花と匂い

昭和四十五年五月二十五日　発行
昭和四十五年八月二十五日　三刷

定価　五二〇円

著者　伊藤　整
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(03)二六〇一一一一
振替東京八〇八番
郵便番号一六二

(乱丁・落丁本はお取替えいたします)

印刷　株式会社金羊社　製本　大口製本所
© 1970, Sadako Itô, Printed in Japan

花と匂い　目次

スキー学校……7
友の話……22
桜子のこと……30
再びスキー学校……35
療養生活……42
帰京……57
海老津事務所……70
桜子の立場……74
梅本たま子……91
東京駐在員……105
再び桜子の立場……115
二人の女……129
社長の相談……140

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ステッキ……153
引越し……162
仕事室……168
花山の上京……187
女と男と女……224
小牧一家……242
仕事と女……262
巣の内と外……274
三重の生活……280
アルジャン……292
つまずき……305
むすび……314

装幀　高山辰雄

花と匂い

スキー学校

バスの後部にスキーを積み終り、京都駅裏の案内所前を出発したのは、午後一時かっきりであった。比良スキー学校という赤い文字の腕章をつけた梅本さんが、その生徒という名のスキー客たちの世話をした。

小牧巻吉が主催者の花山隆之助の友人で、教師の一人として東京から着いたばかりと分ると、梅本さんは運転手のうしろの自分の席の隣の窓際に彼を坐らせた。そして自分のナップザックや、手袋、帽子などをその隣に移した。

「まだ会費をお払い込みになっていない方はございませんか？」とか、

「カーレーターの切符を一枚ずつどうぞ」とか、

「お室の組み合せに御希望がございますか？」

などと言って、梅本さんは通路を何度か行ったり来たりしていた。

この車には、梅本さんのほかに若い女の車掌がいるのだが、入口の横の折り畳み椅子に腰をおろしたきりだった。梅本さんと人数の打ち合せをするほかには用がないようだった。

一月の十日を過ぎて比良スキー学校の二泊三日の講習会に申し込んだこのバスの客は、半ばまでが若い勤め人らしい人々、それに大学生か高等学校の生徒と思われる男女であった。

その服装も、赤い毛玉のついた三角帽だとか、キルティングの青いコートだとか、黄色い薄いヤッケだとか、真赤なスノー・ブーツなどが目立った。そして男も女も脚の形がそのまま浮き出すような細いトレンカーというズボンをはいていた。

小牧巻吉は五年前、花山隆之助をキャプテンに組織されていた東京の城北大学のスキー部にいた。選手の候補者というよりは花山の仕事を助けるマネジャー兼記録係であった。

そして今でも彼はその時と同じようなダブダブのスキーズボンをはき、奴凧めいた防水布の大型アノラックを着て、薄い色の雪眼鏡をかけていた。それは彼のうしろに坐っている若いスキー族の目には、間の抜けたようにも、また、古強者にも見えるものだった。その彼も房のついた三角帽だけは、いくらか当世風だった。

もっとも、後方の席にいる連中の中にも、五十歳ぐらいの大学教授か会社の重役かと思われる年配のスキーヤーがいて、これは鳥打帽に着古したダブルの服、毛糸の襟巻という古典的な服装で、明らかに戦前派であった。

どこかで見た人にちがいないのだが、彼は思い出せなかった。その隣にいる彼の妻と見える中年の女性は、白いフード帽に薄茶のヤッケというしゃれた様子であった。四十

歳以上の年配の客も四五名はいた。
一とおり生徒たちの整理が終って梅本さんが小牧のそばに落ちついたのは、バスが東山の坂をのぼり、山科の平地に出て、次ののぼり坂にかかる頃だった。
「比良の雪はどんな様子です?」と小牧がたずねた。
「たんとはありまへんが、この暮れから寒いよって、工合がよろしおます」
梅本さんは前を向いたままそう言って、にこりともしなかった。
梅本さんは小柄だが、身体の線が美しい。スラックスにぴちっと包まれた膝を隠すように、緑色のナップザックを膝の上からはなさない。小牧はまた話しかけた。
「生徒さんたちは京都の人が多いですか?」
「はい、そうどす。でも休みで東京の大学から戻って来てるらしい人もいてはりますし、大阪、神戸、名古屋の人もいてはります」
「あなたも教えていられるんですか?」
「へえ、私は助手のようなもんで、生徒さんの受け入れをしたり、部屋の割りあて、食事の世話から会計と、仕事はぎょうさんあります。でもやっぱり滑るのがたのしみで来ているのやさかい、小さなクラスを持たされることもあり……」
そのあと梅本さんは口のなかで、小さく、聞きとれない言い方になった。
沈黙がつづいた。バスは思ったより早く大津の町の中に入った。湖が見えて来た。バスはその西岸を北に向って、思ったよりよい道路を走りつづけていた。
花山隆之助がどういうわけで比良スキー学校をはじめたのかは分らない。花山は学校を出ると、大阪に本拠を持つ大きな紡績会社に入った。その会社で彼を競技に出してくれる筈だったが、事実は思うようにならなかったようである。厚生課にまわされて、スポーツだけでなく旅行、住宅などの世話を引き受けている、と二年ほど前上京したときに言っていた。
結婚をして、河原町今出川にスポーツ用品店を開いたと言って来たのは去年の春だった。小牧と同郷の信州生れの彼が京都に店を持ったのは、細君が京都の人にちがいない、と思った。
暮れに近くなって、花山から手紙があり、スキー学校を開いたが、思いのほか申し込みが多い。地元ではよい教師を急にそろえるのは骨が折れる。君は室内装飾が専門なのか流行歌の作詞が専門なのか知らないが、身体をしばられる仕事をしているのでなかったら、十日ほどでもいいから手伝いに来てくれないか、と言って来た。
年の暮れ一杯は、室内装飾の仕事で日を切ってまとめねばならないものが幾つかあった。そういう仕事の切れ目に小牧はよく一人で東北地方の山へスキーに出かけるのだったが、その暮しかたを花山は心得ていての誘いであった。流行歌の作詞は小牧のホビー、道楽で、それで暮しを立てているわけではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

スキー教師というのは、神経の疲れるもので、自分は思うように滑れはしない。孤独であることができない、という点で、それは小牧のスキー目的に反するものだった。

しかし、スキーヤーはどんな山でも一度行ってみたいものだ。比良の暮雪などと呼ばれる古典的な山の雪景色を見るのをたのしみに、小牧巻吉は花山の仕事を手伝うことにして、今日京都へ着いたのだった。

世話役として山から来ているらしい梅本さんは、その身のこなしを見ると、てきぱきした感じなのに、その京言葉が軟らかで聞きとりにくかった。そっとしといておくれやす、と言われているようで、小牧は専ら窓のそとの湖の冷たそうな水面を見ていた。日は照っているが、水は暗く濁って、小波が立ち、寒々とした景色に見えた。

湖岸をしばらく走ったところで、それまで運転手のそばに黙って腰かけていた車掌が、小さな手のひらに入るようなマイクロフォンを手にし、客席を向いて立ちあがった。頬の赤い、二十歳前に見えるあどけない顔だったが、落ちついた声でアナウンスをはじめた。

「皆さま、スキー場到着までのお時間を少々頂きまして、比良山についての御案内を申し上げます。

「比良山と申しますのは、一つの山ではございません。比叡山の北につらなって、琵琶湖の西岸にそびえる武奈ケ岳、釈迦岳、蓬莱山、打見山、権現山などを含む山地を包括して比良山と申します。語源はアイヌ語のピラであるらしく、これは絶壁のあるところ、または扇形にひろがった土地という意味だそうでございます」

アイヌ語の語源などという学術的なことを言い出しながら、その頬の赤い車掌はちっとも恥ずかしがったり、ひるんだりしなかった。その京都なまりによる標準語の発声法にも職業的な懸命さがあって、けなげな感じを与えた。車内はしーんとなった。

「しかし学者さんによりましては、それはピラではなく、ピラニすなわちブナの木だとか、ピュイラすなわち急流の意味だとも申します。ここの山は千メートルを越したのが多うございます。今日皆さまがお乗りになりますカーレーターの乗車口が標高三百メートルでございますから、標高差七百メートルの急な斜面が美事にそびえ立っております。峰の上に立ちますと、すばらしい眺めを楽しむことができます。

「こんにち、皆さまの乗るカーレーターは打見山の峰まで一挙に運び上げますが、その近くに蓬莱山と申しまして、一一七四メートルの高い峰があり、いわゆる比良の暮雪と申しますのは、主として裏の日本海からこの峰に吹きつけて残る雪を申すのでございます。

「さて、古代シナの神仙思想における東方の蓬莱の国というのは、珍しい白色の草木、金銀の宮殿、宝石、珍獣などに富むところで、仙人がそこにいて不老不死の薬を練っていると考えられたところでございますが、それは京都からこの山のあたり一帯を指しているとも申します。

「秦の始皇帝は、紀元前二一九年に徐芾なる臣下を遠く東

方の海上に送って、その不老不死の薬を求めさせました。ものの本によりますと、その徐芾は『日本の近江の比良にいたりて遂に帰らず』とあるそうでございます。比良の蓬萊はそういうところから名を得たとも考えられるのでございます」

そのとき、後方の座席の中で若い男のはしゃいだ声が、「本当かね、お姉ちゃん?」と言った。笑い声が湧き、車掌はマイクロフォンを口にあてたまま、真赤になって、あとを続けることができなくなった。その顔がゆがんで泣き出しそうになった。

「君、人の話というものは寛容な態度をもって聞くべきだ」と老人らしい声が静かにたしなめた。

「どうぞ続けて下さい」

あ、あの戦前派の服装の老人だな、と小牧は思った。

女車掌は、若い男のひやかしと、老紳士の発言とのあと、ぷいと顔をそむけ、話をやめてしまった。エンジンのとどろきと震動のなかで客たちは沈黙し、窓のそとを湖のほとりの冬木立、住宅、農家、畑などが過ぎ去った。

彼女のしゃべったことは、バス会社が遊覧旅行の客に対するサービスとして若い車掌たちに教え込んだ案内記であり、彼女にその内容に責任があるわけではなかった。

やがて彼女は、その仕事を途中でやめるのを落ちつきの悪いものに感じたらしく、気をとり直し、少し低い声で次をつづけた。

「わが国へ仏教が渡来いたしましてからのち、比叡山につづくこの比良山一帯の地はその修験道場のセンターとなりました。釈迦岳、権現山、明王谷、経塚谷などという名称はそれを語っておりますが、平安朝の初期仁明天皇の御代には、打見山の経塚谷に西方寺という天台宗の大寺院が設けられました。また明王谷の入口には相応和尚が開いたと言われる天台宗別院の明王院が現存しておりますが、その昔は、あちこちの谷間、台地などに幾多の寺院仏閣が隠見し、比良三千坊と言われまして、織田信長の兵火に焼き払われるまで比良山一帯は、最も盛んな山岳修験道の本拠をなしていたということでございます。

「かの奈良東大寺の大仏殿、それから石山寺を造営したと言われる良弁大僧正は、幼少のみぎり、今日の打見山のふもとなる南船路(みなみふなじ)の茶畑の中に遊んでおりましたところ、突如天空から舞い下りた大鷲にさらわれまして、奈良東大寺二月堂の大杉まで運ばれたというのは有名な宗教縁起談『良弁杉』の一節でございます」

今度は根拠のありそうな話になって来たので、客はおとなしく耳を傾けた。

「なおこの付近には著名な堅田の浮見堂、小野篁(たかむら)神社、小野道風神社などもございますが、女心の哀れをとどめるお話を二つ申し上げて、私のつたない説明の終りとさせていただきます。

「その一つは比良山のふもとに住んでいたお孝という人妻の話でございます。蓬萊山の山陰には小女郎池という小さな沼がございますが、ある日お孝はその沼のほとりで水の

したたるような美青年に逢い、忍び逢いを重ねることになりました。そのあげくお孝は夫も子供も棄て、そのよろめきに身を滅ぼすにいたりましたが、この美青年こそは、その沼に住む大蛇であったのでございます。

「いま一つのお話は、右手の堅田の浮見堂の北側にできました琵琶湖大橋のあたり、すなわち湖水の一番狭いところに起った悲劇でございます。御承知のように、これからのちの早春の季節には、比良八荒または比良おろしと申しまして、山上の冷気と湖水の暖気との交流により水面に急激な波風が立ちます。むかし比良山のふもとに初荒山という美男の力士がおりました。湖の向う岸中主町の名主の娘が彼に恋いこがれ、男のともす燈火を目あてに九十九夜をタライに乗って、往復四キロの水路を通いましたが、百夜目に、男の心がわりから灯が消され、比良八荒の波風に呑まれて、哀れにも彼女は溺死したのでございます」

話が終ったとき一せいに起った拍手をあびて、車掌は機嫌を直し、微笑を浮べて腰をおろした。

やがてバスは左方の谷に入って、あえぎながら曲りくねった道をしばらくのぼった。

「皆さま、長いあいだお待ち遠さまでございました。間もなくバスはカーレーターの山麓ステーションに到着いたします。どうぞごゆっくり、スキーをおたのしみ下さいますようにお祈りいたします」

バスの車掌はそう言って、車がとまるとすぐ飛び下り、ピッピッと笛を吹きながら、車をステーション前の広場で都合のいいところまで誘導した。スキーヤーたちはこういう場合、車がとまって、車の後部からおろされる自分のスキーを少しでも早く手に入れようとあせるものだ。

それをさばくのが梅本さんの仕事であった。

「スキーをお持ちになってから、もう一度お集まりいただいて人数を確かめます。カーレーターの登りは、頂上まで二十分でございます。到着ステーションのすぐ前が宿のロッジ・センターでございます。一先ず、そこのロビーにお集まり頂いて、室割り、荷物整理をします。万一、はぐれたり、遅れたりした方は、比良スキー学校本日到着組という呼びかけのアナウンスをお待ち下さい」

人を集めて統一行動を取らせるのは、やっぱり煩雑なことだ、と思いながら、小牧巻吉は梅本さんの話を聞いていた。四五名の若い男たちの組は、梅本さんの声も耳に入らぬように、バスの後尾のところから自分のスキーを持ち出そうとしていた。

小牧は立って行って、手近のものから順にスキーを取り出し、その若い男たちに運び下ろさせ、バスの前のカチカチに凍った地面に並べてやった。

山の斜面はその広場の上に、ほとんど七十度もあるかと思われるけわしさで一段、二段、三段と頂上までつづいていた。このステーションからその急斜面の背骨のような稜線の途中へ、箱型の高速道路のようなものが、高い橋脚を見せて斜めに取りついていた。それがカーレーターというモノレールのようなもののルートだった。

その白い箱型のルートは、山の背骨に取りついた所から頂上に向い、その背骨のとがったところを伝わって、一直線につづいていた。ある部分は橋脚を持ち、ある部分はトンネルとなって、太い白い線のように頂上まで這いあがっていた。

急な斜面のところどころに、黒ずんだ林の間に雪が見え、頂に近いあたりは斜面がすっかり雪におおわれていた。そのにぎやかなステーションの一画を、比良の山々がきびしい表情で見下ろしていた。

「うーん、やっぱし、なかなかの山やな」とか、

「うまいとこへルートをつけよったな」

自分のスキーを確保した青年たちは一かたまりになって山を見上げていた。

「小牧先生、助かりましたわ。いつもスキーをあげ下ろしするのが厄介でしてねん」

梅本さんは、スキーを下ろし終えた小牧に近づき、小声で礼を言うと、すぐまた小走りに集団の先頭に立って、ステーションの中へ導き入れた。

最後に小牧が改札口のところで梅本さんと一緒になると、そのすぐ前にいるのが、あのハンチングをかぶった一言居士の五十男とその妻だった。

二人並んで坐るようになったロマンス・シートという名の揺り籠のようなカーが、ゆるい速度で次々と待っている人々の目の前に来た。それの支柱に手をかけ、スキーをかかえたまま乗るのだった。

十人ぐらいがまだそのプラットフォームに立って、カーのまわって来るのを待っていた。上から下りて来るカーはそのステーションで速度をおとし、大きく円を描き、反対側で客を下ろしてから、こちらにまわって来るのだった。

「いいかね、君がさきに乗るんだ。危ないことはない。大丈夫だ」と、老紳士が、そばにいる小柄な細君に言いふくめていた。

カーがまわって来ると、その細君は短いスキーを先ずひょいとのせ、自分も乗った。老紳士はそのあとに乗り込もうとして、

「早く早く向うの席に移って。それじゃわしが乗れんじゃないか。ほら、あぶない、おっと」と支柱にとりついたまましばらくプラットフォームを歩き、危うく乗り移った。スキーをたぐり寄せるように抱きあげたが、無器用な老人だった。

その次が梅本さんと小牧だった。カーはプラットフォームを離れると、クリーム色に明るく光るジュラルミンのトンネルを静かに、かなりの速度でのぼって行った。座席は傾斜が強くなるに従って調節され、水平を保つようになっていた。二メートルほどの間をおいてのぼって行くカーと、同じように人を乗せて降りて来るカーがトンネルの中でたえずすれ違った。

突然、前のカーの老紳士がふりかえって小牧と梅本さんの方を見た。

「いや、これは、中々よろしいですな。ケーブルカーより

も安定感があって、新式ですな、これは」

言うこととはうらはらに、老紳士は、小牧と梅本さんが並んでいるさまを、じろじろと見た。二人が恋人なのか、夫婦なのか、それとも友人なのかを見定めてやる、という目つきだった。小牧はその老紳士の目つきには構わず、その言葉に調子を合わせて、にこにこ笑い、うなずいて見せるだけで、声は出さなかった。このジュラルミンのトンネルの中で、わめくような大声を出すのは閉口だ、と彼は思った。

老紳士はますます機嫌がよく、トンネルの窓から山頂を見上げたり、湖水の方をふりかえって見たりしていたが、また小牧に言った。

「君たちはあれですか、スキー学校の方ですか？　え、お二人とも？」

小牧巻吉は、子供をあやすような顔でまたうなずいてみせた。

その老紳士の好奇心はまだ満たされないようであった。老人というものは、若いものに対して妙に嫉妬深く、男と女が何でもなく同席しているのを許したがらないものだ。

小牧はその老紳士に見せつけるように、梅本さんの青いナップザックをその背中から外してやり、それを自分の膝にあるリュックの上に重ねた。その様子を目にすると、老紳士はやっと分った、というきびしい顔になって前へ向き直った。彼はその細君の両手で支えていたスキーを取って自分のスキーと重ね、二人の座席の間に横たえた。

小牧は梅本さんと顔を見合せて笑った。あの紳士が自分の教える組に入ったらきっと骨が折れるな、と彼は思った。

その一行がカーレーターを出てロッジに着いたのは、夕刻前の雪質の最もよくなるときで、スキーヤーたちはみな外に出ており、ロビーにも食堂にも残っている人は少なかった。窓の外の斜面のあちこちでカラカラ、カラカラと鳴りつづけるリフトの音や、なにか叫び合っているスキーヤーの声が響いていた。

室の割りあて、荷物の片付けが一通りすむと、梅本さんが小牧巻吉に言った。

「今日はもう時間がおへんさかい、私はほんとの初心者を集めて、靴のはき方、締め具のつけ方を教えます。滑れる人は退屈しはるでしょうから、足ならしさせてくれはりまへんか」

「よろしい。そうしましょう」

小牧巻吉は生徒たちがストーブのまわりに集まるのを見はからって、さっそく教師業をはじめた。

「皆さん、私はこの比良スキー学校の新任教師、城北大学スキー部OBの小牧巻吉と言います。流行歌の作詞家に同じ名の小牧巻吉という先生がいますが、偶然の同姓同名で、スキーヤーの私とは無関係ですから、間違わぬようにして下さい」

そう言って彼は一同を見まわした。予期に反して質問もなく、笑うものもいなかった。小牧巻吉なる流行歌の作詞者は、彼自身が考えているほど人に知られていないことが

これで分った。彼は少ししょげて、次の話にかかった。
「さて、ここにいられる梅本先生が、今日買ったばかりのスキーを持って来られた人、それから靴と締め具の扱いかたのよく分らない人、杖の使い方の分らない人、その他根本的なことをお教えします。去年滑ってみたが、どうもスキーの右と左が分らなかった、などという人もここに残って梅本先生のお話をうかがって下さい」
それでも誰も笑わなかったので、彼は念のため更につけ加えた。
「スキーには天才的な人がいるものです。即ちその人は、初めからどこまでも転ばずに滑っていくが、しかし止めることと曲ることは習わなくてはできない。そういうお方は、この山の頂上では危険です。後方のシル谷とか大蛇の出る何とか池に落ちこんだり、また前方の琵琶湖に落ちかかったりすると、もう一度カーレーターで上がって来なければなりません。そういう方も一応残って梅本先生のお話を聞いて下さい」
この話は多少の笑いを生徒たちから引き出すことに成功した。
「私は滑れる人々とご一緒に、ウォーミング・アップとしてリフトの終点あたりまで、軽く滑り、軽く歩いてみようと思います。少し滑ってもすぐ転ぶような安全な人、または右も左も回転する自信のある人は、私について来て下さい」
半数は梅本さんのところに残り、半数が小牧巻吉について来た。その中に、あの大学教授または会社重役と思われる老紳士がいた。その細君は梅本さんのところに残ったようであった。
小牧は先頭に立って歩きながら、十二三名の生徒の歩き方を時々ふりかえって眺めた。スキーの上手下手の程度は、歩き方を見ただけで分るものである。
その中にずば抜けて上手そうなのがいた。青いナップザックを負い、小牧のすぐあとから歩いて来る青年だった。
小牧巻吉がその生徒たちを連れて出たロッジの前は、打見山の山頂であった。そこは、さっき下りたカーレーターの到着駅からも近く、リフトやロープウエーの集まるところである。
この山の南方に峰つづきにそびえている蓬莱山頂との距離は一キロ以上もあるように見えるが、その間が起伏のゆるやかな広いスキー場になっていて、スキーヤーが、ゴマを撒いたように一面に散らばっていた。
夏の海水浴場を思わせるような人の群れであった。そんなところで滑ったり転んだりしているのだから、危険なことは目に見えている。しかしスキーヤーたちは、人に見られながら滑っていないと、滑ったような気がしないらしいのである。海水浴場とスキー場とは、群集の中で自分を忘れるために人の集まるところのようである。
小牧巻吉は混雑する場所を避けて、少しでも安全なところへと生徒たちを導いて行った。歩きかたから見て一番上手な青年がすぐ後について来た。そしてもう一人と話し合

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com